

川端康成

新潮現代文学 1

古都 眠れる美女

—— 川 端 康 成

新潮社版

装画・東山魁夷
口絵写真・田沢進
外箱写真・小島啓佑

© Hideko Kawabata
Printed in Japan 1979



古都・眠れる美女

△新潮現代文学1V

昭和五十四年五月十日印刷
昭和五十四年五月十五日発行

定価一、二〇〇円

著者 川端康成

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

業務部・(〇三)二六六―五一―

編集部・(〇三)二六六―五四―

振替 東京 四一八〇八

印刷所 株式会社光邦

製本所 新宿加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は小社通信係宛御送
付下さい。送料小社負担にてお取
替えいたします。

目次

千羽鶴

5

波千鳥

87

眠れる美女

139

古都

200

たんぽぽ

322

山本健吉

解説

412

年譜

421

古都・眠れる美女

千羽鶴

千羽鶴

一

鎌倉円覚寺の境内にはいつてからも、菊治は茶会へ行こうか行くまいかと迷っていた。時間にはおくれっていた。

円覚寺の奥の茶室で、栗本ちか子の会があるたびに、菊治は案内を受けていたが、父の死後一度も来たことはなかった。亡父への義理の案内に過ぎまいと見捨てていた。

ところが今度の案内状には、弟子の一人の令嬢を見てほしいと書き添えてあった。

これを読んだ時に、菊治はちか子のあざを思い出した。

菊治が八つか九つの頃だったろうか。父につれられてちか子の家に行くと、ちか子は茶の間で胸をはだけて、あざの毛を小さい鉄で切っていた。あざは左の乳房に半分かかって、水落の方^{みづおち}にひろがっていた。掌ほどの大きさである。その黒紫のあざに毛が生えるらしく、ちか子はその毛を鉄でつんでいたのだった。

「あら。坊ちゃんと御一緒でしたの?」

ちか子は驚いた風で、襟を合わせようとしたが、あわててかくすのはなお工合悪いのか、少し膝を廻してから、襟をゆっくり帯にさし込んだ。

父に驚いたのでなく、菊治を見て驚いたようである。女中が玄関へ出て取りついだから、ちか子は菊治の父が来たとは知っていたはずだ。

父は茶の間へはいらなかった。隣りの間に坐った。座敷で稽古場になっている。

父は床の掛物を見ながら、

「一服いただこうか。」

と、ぼんやり言った。

「はい。」

そう答えたが、ちか子も直ぐには立って来なかった。

ちか子の膝の新聞紙に、男のひげのような毛が落ちているのも、菊治は見えてしまっていた。

真昼なのに天井裏で鼠が騒いでいた。縁近くに桃の花が咲いていた。

炬のそばに坐ってから、ちか子は少しぼんやり茶をたてた。

それから十日ばかり後に菊治は、母がさも驚いた秘密をあかすように、ちか子は胸にあざがあるために結婚しないのだと、父に話しているのを聞いた。母は父が知らないと思っている。母はちか子に同情したらしく、いたましいという顔をしている。

「ふうん。ふうん。」

と、父は半ば驚いたような相槌を打っていたが、

「しかし、亭主になら見られたってかまわんじゃないか。承知の上で、もらってくれれば。」

「私もそうは言ってあげたのよ。でも、女の身としてはねえ。私は胸に大きいあざがありますとは言い出せませんわ。」

「もう若い娘でもあるまいし。」

「やっぱり言にくいわね。これが男だったら、結婚してから分つても、笑ってすませるかもしれないけれど。」

「それで、お前にそのあざを見せたの？」

「まさか。馬鹿なことおっしゃるわね。」

「話だけか。」

「今日お稽古に來た時にね、いろんな話が出て……。つい打ち明ける氣になったのね。」

父は黙っていた。

「結婚したとしても、男の人はどうでしょう。」

「いやだし、氣持は悪いだろう。しかしまあ、そんな秘密も染しみになって、魅惑でないとは限らないね。ひけめがあるために、いいところが出るかもしれないし、實際は大した故障じゃないね。」

「私も故障にはならないって慰めたのよ。でも、あざがお乳にかかっているんですって。」

「ふうん。」

「子供が出來た時に、お乳を吞ませることを考えると、それが一番つらいらしいの。御主人にはいいとしても、赤ん坊のためにねえ。」

「あざで乳が出ないというのか。」

「そうじゃなく……。お乳を吞ませる赤ん坊に見られるのがつらいというのよ。私もそこまでは氣がつかなかったけれど、当人になってみるといろいろ考えるもんですね。赤ちゃんが生れた日から吸いつく、目が見えはじめた日から見る、母親のお乳に醗いあざがあるわけでしょう。この世の第一印象、母の第一印象が、乳房の醗いあざで——深刻にその子の一生つきまとうでしょう。」

「ふうん。しかし、それも思い過しの苦勞だね。」

「そう言えば、ミルクで育てたっていいわけですし、乳母だって。」

「あざがあつたって、乳が出ればいいようなものだ。」

「でも、そうはいきません。私、それを聞いて涙が出ましたわ。なるほど思いましたわ。うちの菊治にだって、あざのあるお乳は吞ま^くせたくありませんもの。」

「そうだね。」

菊治は白^くっぽくれている父に義憤を感じた。菊治もちか子のあざを見たのに、その菊治を無視する父にも憎悪を感じた。

今しかし、それから二十年近く後の菊治は、あの時は父も困惑していたのだろうと、苦笑を感じないでもない。

またしかし、菊治が十歳を越したころ、あの時の母の話はよく思い出されて、あざのある乳を吞んだ、腹ちがいの弟か妹が出来たらと、不安におびえたものであった。

よそにきょうだいの生れることが恐ろしいばかりでなく、そういう子供そのものが恐ろしかった。あの大きいあざに毛の生えた乳を吞んだ子は、なにか悪魔の恐ろしさを持っていそうに、菊治には思われてならなかった。

さいわい、ちか子は子供を産まなかつたようである。邪推をすると、父が産ま^なかつたのかもしれないし、母の

涙を流させた、あざと赤ん坊とのことも、産みながらせぬために父からちか子に吹き込んだ口実だったのかもしれないが、とにかく、父の生前にも死後にも、ちか子の子供は現われなかつた。

父といっしょの菊治にあざを見つけられて間もなく、ちか子が菊治の母に打ち明けに来たのは、菊治から母にしゃべられる前にと、先手を打ったつもりだったのだろう。

ずっとちか子は結婚もしなかつたし、やはりあのあざが生涯を支配したのであろうか。

しかし、菊治にもあのあざの印象は消えないから、どこかで彼の運命とかかわりがついて来ないとは言えない。

茶会にかこつけて令嬢を見せたいと、ちか子が言つて来た時も、あのあざが菊治の目に浮んで、そのちか子の紹介だから、毛ほどのしみもない玉の肌の令嬢だろうかと、ふと菊治は思つたりした。

父はちか子の胸のあざを、時折指でつまんでみたりすることはなかつただろうか。父はあのあざに噛^かみついたことだつてあるかもしれない。菊治はそんな妄想^{もうそう}もした。

今も寺山の小鳥のさえずりのなかを歩きながら、そんな妄想が頭をかすめた。

しかし、菊治にあざを見られてから二三年後には、ちか子はなんだか男性化して、今ではもう完全な中性になつて

いる。

今日の茶席でもしゃきしゃきふるまっているだろうが、あのあざのある乳房もしなびて来たかもしれない。そう気づいて菊治がほっと笑いかかった時、令嬢が二人うしろから急いで来た。

菊治は道をゆずるように立ちどまって、

「栗本さんのお茶席は、この路の奥でしょうか。」

と、たずねてみた。

「はあ。」

二人の令嬢は同時に答えた。

聞かなくてもわかっていることだし、令嬢のきもので茶室へ行く路と知れているのだが、菊治は自分をはっきり茶会へ行かせるために言ったのだった。

桃色のちりめん白の千羽鶴の風呂敷を持った令嬢は美しかった。

二

二人の令嬢が茶室へ入る前に足袋をはきかえている時、菊治も来た。

令嬢のうしろからなかをのぞいてみると、八畳らしいが、膝を押し合うほどに並んでいた。花やかなきものの人ばかり

りのようだった。

ちか子が目ざとく菊治を見つけて、あっという風に立って来た。

「まあ、さあどうぞ。珍客。よくいらして下さいましたわね。そちらからお上りになって、かまいませんから。」

と、床に近い方の障子を指さした。

なかの女達がいっせいに振り向いたけはいで、菊治は赤くなりながら、

「御婦人ばかりですか。」

「そう。男の方もいらしてましたが、お帰りになって、あなたが紅一点。」

「紅じゃない。」

「菊治さんは紅の資格がありますよ、大丈夫。」

菊治はちよっと手を振って、向うの入口から廻るとしらせた。

ここまではいて来た足袋を千羽鶴の風呂敷に包みながら、令嬢は菊治を先きに通そうと、行儀よく立っていた。

菊治は隣りの間に上った。菓子箱だとか、運んで来た茶器の箱だとか、客の荷物だとか、少し散らかして置かれ、奥の水屋で女中が洗いのをしていた。

ちか子が入って来ると、菊治の前へ膝を落すように坐って、

「いかが。いいお嬢さんでしょう。」

「千羽鶴の風呂敷のひとつですか。」

「風呂敷？　風呂敷なんか知らない。今そこに立ってた、きれいな方のお嬢さんですよ。稲村さんのお嬢さん。」

菊治はいまいにうなずいた。

「風呂敷なんて、変なものに目をつけて、油断がならないわ。いっしょにいらしたのかと思って、手廻しのいいのに驚いたところ。」

「なにを言ってる。」

「来る道から会って、御縁があるわけね。稲村さんはお父さんも御存じでしたし。」

「そうですか。」

「横浜の生糸商だったお家。お嬢さんには今日のこと言っておりませんからね、そのおつもりで、よく御覧なさい。」

「ちか子の声が小さくないので、襖一重の茶席へ聞えはしないかと、菊治が閉口していると、ちか子がふっと顔を寄せて来て、

「しかし、ちょっと困ったことがあるんですよ。」

と、声を低めた。

「太田さんの奥さんがね、来ちゃったんですよ。お嬢さんいっしょにね。」

そして、菊治の顔色をうかがいながら、

「今日はお呼びしたわけじゃなかったんだけど……。でもこういう席は、通りがかりのどなたがいらしてもいいことになってますし、さっきはアメリカ人が二組寄って行ったくらいですからね。ごめんなさい。太田さんが聞きつけていらっしやる分には、しかたがない。だけど、菊治さんのことは無論御存じありません。」

「僕も今日のことは……。」

見合いをするつもりなどはない、と菊治は言おうとしたが、口に出なかった。咽がこわばるようだ。

「工合の悪いのは奥さんの方で、菊治さんは平気な顔でいらっしゃればいいわ。」

菊治はちか子のこの言い方も癪にさわった。

栗本ちか子と父との交渉は軽くて短かったらしい。父の死ぬまで、ちか子は便利な女として家に入出入りを持っていた。茶会の時ばかりでなく、ただの客の時も台所へ来て働くという風だった。

男性化してしまつて、母がいまさら嫉妬するなど、苦笑すべき滑稽なことのようだった。父がちか子のあぎを見ていると、後には母も気づいたにちがいないが、その時のもう風の過ぎた後で、ちか子はさばさば忘れた顔をして、母のうしろに立っていた。

菊治もいつとなくちか子を軽くあつかつて、わがまを

ぶつつけているうちに、幼い頃の息苦しい嫌悪は薄らいだようだった。

ちか子が男性化したのも、菊治の家の調法な働きものになったのも、ちか子らしい生存の方法だったかもしれない。菊治の家を頼りに、ちか子は茶の師匠として、ささやかな成功をした。

ちか子はただ一つ菊治の父とのほかない交わりだけで、自分の女をおさえこめてしまったのだらうと、父の死後菊治は思うと、淡い同情さえ湧いた。

母がちか子にあまり敵意を抱かなかったのは、一方に太田夫人の問題で牽制されたからでもあった。

茶の仲間だった太田が死んでから、菊治の父は茶道具の処分を引き受けて、未亡人と近づいた。

そのことをいち早く母に注進したのはちか子だった。

無論ちか子は母の身方になって働いた。働きすぎるほどだった。ちか子は父のあとをつけ廻したり、未亡人の家へ度々強意見に出向いたり、彼女自身の地底の嫉妬が噴火したかのようであった。

内気な母はちか子の煙を立てるようなおせっかいに、むしろ氣を吞まれた形で外聞を悪がった。

菊治のいる前でも、ちか子は母に太田夫人のことを罵った。母がいやがると菊治にも聞かせておけばよいと言った。

「この前行った時も、私がさんざん言ってやったのを、子供が立聞きしてたんですね。隣りの部屋で不意にすすり泣きが聞えるじゃありませんか。」

「女のお子さん？」

と、母は眉を曇らせた。

「そうです。十二になるとか言いました。太田の奥さんてのは、少し足りないんですね。叱るかと思ったら、自分がわざわざ立って行って、子供を抱いて来て、膝に抱きずがらせて、私の前に坐るんですね。子役といっしょに泣いて見せるんでしょう。」

「お子さんが可哀想じゃないの。」

「ですから、子供も責め道具に使ってやりましょうよ。子供はお母さんのことを、ちゃんとみな知ってるんですからね。円顔の可愛い子さんですけれど。」

と、言いながら、ちか子は菊治を見て、

「うちの菊治さんも、お父さまに何とかおっしやればいいんですよ。」

「あまり毒をまかないで頂戴。」

と、母はさすがにたしなめた。

「奥さまが毒をお腹に吞んでらっしゃるからいけませんのよ。ひと思いに吐き出せばいいのよ。奥さまはこんなにお瘦せになったのに、向うはづやつや太ってるんですからね。」

足りないせいでしょうけれど、しおらしそうに泣きさえずればいいと思って……。第一、お宅の旦那さまをお迎えする座敷に、亡くなった御主人の写真をきれいに飾つたままですよ。旦那さまもよく黙ってらっしゃると思いますよ。」

そんな風に言われていた夫人が、菊治の父の死後、ちか子の茶会に娘までつれて来ている。

菊治は冷たいものに打たれた。

ちか子の言う通り、今日は招いたのではなかったにしろ、ちか子と太田夫人とは父の死後交際していたのかと、菊治は思いがけなかった。娘までちか子に茶を習わせているのかもしれない。

「おいやでしたら、太田さんに先きへ帰っていただきましょうか。」

と、ちか子は菊治の目を見た。

「僕はおかまわない。向うで帰られるなら、どうぞ。」

「そんな気働きのある人なら、お父さまもお母さまも御苦労はなかったんですよ。」

「しかし、お嬢さんがいっしょでしょう？」

菊治は未亡人の令嬢を見たことがない。

太田夫人と同席で千羽鶴の風呂敷の令嬢に会うのは悪いと、菊治は思った。また、太田の令嬢にここで初めて会う

のは、なおいやだった。

しかし、耳もとにからみつくようなちか子の声が、菊治の神経にきわつて、

「とにかく僕の来たことは分ってるんでしょう。逃げかくれも来んさ。」

と、立ち上った。

床に近い方から茶室に入った。入ったところの上座に坐った。

ちか子が後を追って来て、

「三谷さん。三谷さんの御息です。」

と、切口上に菊治を紹介した。

それにつれてもう一度菊治はいさつをし直して、顔を上げると、令嬢達のはっきり見えた。

菊治は少し上つていたらしい。きものの花やかな色彩が目にあふれて、はじめ一人一人の見分けはつかなかったのだ。

それをはっきりしてみると、菊治は太田夫人ととともに向き合っていることに気がついた。

「まあ！」

と、夫人は言った。一座の皆に聞き取れた、ひどく素直でなつかしげな声だった。

「御無沙汰いたしました、お久しぶりでございますわ。」

と夫人は続けた。

そして、隣りの令嬢の袂のはしを、早くあいさつしなさいという風に、軽く引っぱった。令嬢は困惑したらしく、赤くなって頭を下げた。

菊治は実に意外だった。夫人の態度には、みじんの敵意も悪意も見えない。いかにもなつかしげである。菊治との思いがけない出会いが、はつとうれしかったらしい。満座のなかで自分がどんな立場かも、夫人は忘れたとしか見えない。

令嬢はじつとうなだれたままである。

それに気がつくと、夫人の頬も染まって来たが、菊治の傍へ寄って来たそうなの、もの言いたげな目で、菊治を見ていて、

「やはりお茶はなさってらっしゃいますの？」

「いや、僕は一向。」

「そうでございますか。でも血を引いてらっしゃいますから。」

夫人は胸いっぱいになって来るらしく、目の色が濡れた。菊治は父の告別式の時以来、太田の未亡人を見ていない。その四年前とほとんど変らぬようである。

色の白い長めな首と、それに不似合な円い肩も同じで、年より若い体つきである。目の割に鼻と口が小さい。小

い鼻は、よく見ると恰好がよくて、ほほえましくなる。ものを言う時に、どうかすると受け口に見える。

令嬢も長めな首と円い肩とを母親から受けついでいた。

口は母親より大きく、固く閉じていた。娘の口にくらべて母の唇の小さいのは、なにかおかしいようだった。

母親より黒目勝ちの令嬢の目は悲しげだった。

ちか子が炬の炭をのぞいてみてから、

「稲村さん、いかが？ 三谷さんに一服さしあげて下さいませんか？ あなたお点前まででしょう。」

「はい。」

と、千羽鶴の風呂敷の令嬢が立つて行った。

この令嬢が太田夫人の横に坐っているのを、菊治は知っていた。

しかし、菊治は太田夫人と太田令嬢を見てから、稲村令嬢に目を向けることを避けていたのだった。

ちか子は稲村令嬢に点前をさせて、菊治に見せようというのだろう。

令嬢は釜の前からちか子を振り向いて、

「お茶碗は？」

「そうですね。その織部がよろしいでしょう。」

と、ちか子が言った。

「三谷さんのお父さまが御愛用のお茶碗で、私がお父さま

にいただいたものですから。」

令嬢が前に置いた茶碗は、菊治も見おぼえがあつた。父が使つていたにちがいないが、父が太田未亡人から譲り受けた茶碗である。

亡夫の遺愛品が菊治の父からちか子の手に移り、この席にこうして出ていることを、太田夫人はどんな気持ちで見ているのだろうか。

菊治はちか子の無神経に驚いた。

無神経と言へば、太田夫人もずいぶん無神経だと思へぬことはない。

中年の女の過去がもやつく前で、清潔に茶を立てる令嬢を、菊治は美しく感じた。

三

千羽鶴の風呂敷の令嬢を菊治に見せようという、ちか子のものくろみを、その人は知らないのだろう。

ものおじするところなく令嬢は点前をした。自分で菊治の前へ運んで来てくれた。

菊治は茶を飲んでから、茶碗をちよつと眺めた。黒織部の茶碗で、正面の白ぐすりのところに、やはり黒で早さわらびが描いてあつた。

「お見覚えがおありでしょう。」

と、向うからちか子が言つた。

「さあ。」

菊治はいまいに言つて、茶碗を下に置いた。

「そのわらびの芽に、山里の感じがよく出ておりますね。春さきにいいお茶碗で、お父さまもお使いになりました。

今ごろ持ち出すのは、少し時候おくれですけど、ちょうど菊治さんにさしあげるのには。」

「いや、うちの父がしばらく持ったことなんか、この茶碗にとつては、問題じゃありませんよ。だって、利休の桃山時代から伝世の茶碗でしょう。何百年ものあいだ、大勢の茶人が大事に伝えて来たんだから。うちの父なんか。」

と、菊治は言つて、この茶碗の因縁を忘れようとした。

太田から太田未亡人へ、未亡人から菊治の父へ、父からちか子へ、そして太田と菊治の父との男二人は死に、女二人はここにいる。これだけでも奇怪な運命の茶碗だった。その古い茶碗をここでまた、太田の未亡人や令嬢も、ちか子も、稲村の令嬢も、ほかの令嬢たちも、肩にあてたり、手で撫なででさすったりしたのだった。

「そのお茶碗で、私も一服いただきたいわ。さっきは別のお茶碗でしたから。」

と、太田夫人が少し出しぬけに言つた。

菊治はまた驚いた。おめでたいのか、恥知らずなのか。

じつと下向いている太田の令嬢が、菊治は気の毒で見えられなかった。

太田夫人のために稲村令嬢がまた点前をした。一座の目はその方に注がれたが、この令嬢はおそらく黒織部の茶碗の因縁も知らないのだろう。習った型通りに所作しきをしている。

癖がなく素直な点前である。姿勢の正しい胸から膝に気品が見える。

若葉の影が令嬢のうしろの障子にうつって、花やかな振袖の肩や袂に、やわらかい反射があるように思える。髪も光っているようだ。

茶室としては無論明る過ぎるのだが、それが令嬢の若さを輝かせた。娘らしい赤い襦紗じゆさも、甘い感じではなく、みずみずしい感じだった。令嬢の手が赤い花を咲かせているようだった。

令嬢のまわりに白く小さい千羽鶴が立ち舞っていきそうに思えた。

太田未亡人は織部の茶碗を掌に入れて、

「この黒に青いお茶は、春の緑が萌え出たようでございますね。」

と言ったが、亡夫の所持であったとは、さすがに口に出

さなかった。

その後で型だけのお道具拝見があった。令嬢たちは道具のことなど詳しくないので、だいたいちか子の説明を聞いているだけだった。

水指みづさしも茶杓ちやくも前に菊治の父のものだったが、ちか子も菊治も黙っていた。

令嬢たちが立って帰るのを見ながら、菊治は坐っていると、太田夫人が近づいて来た。

「さきほどから失礼いたしました。お腹立ちでしょうと思えますけれど、私はお目にかかりますと、おなつかしさが先きに立って。」

「はあ。」

「ずいぶん御立派におなりなさいますして。」

夫人の目には涙でも浮びそうであった。

「そうそう、お母さまも……。お葬式にうかがわなければと思いながら、よう参りませんでした。」

菊治はいやな顔をした。

「お父さまにお母さまも続けて……。おさびしゅうございますね。」

「はあ。」

「まだお帰りになりませんか？」

「はあ、ちょっと。」